

湯河原ロータリークラブ



WEEKLY REPORT

世界へのプレゼント になろう

第 2602回 例会
平成27年9月25日(金)
天候 雨
合唱 それでこそロータリー
四つのテスト

会長 佐藤 泰文

幹事 山本 明峰

事務所 神奈川県足柄下郡湯河原町宮上 566 湯河原温泉観光協会内
TEL 0465(64)1234 FAX 0465(63)1716

例会場 静岡県熱海市泉 107 ニューウェルシティ湯河原

TEL 0465(63)3721 FAX 0465(63)6401

例会日 毎週金曜日 12:30~13:30

会長挨拶

今週はシルバーウィークで彼岸会でした。

仏教では我々の住む世界をこちらの岸、三途の川を挟んで先祖様の住む世界をあちらの岸と考え、こちらの岸を「此岸」、あちらの岸を「彼岸」といいます。

この極楽浄土の考えは、西の彼方にあるとされているので、太陽が真西に沈む春分・秋分に墓参りや先祖供養を行うようになりました。これは仏教にない習慣ですが、日本独自のもので、中日に夕陽を拝むと功德があると信じられ、中日前後一週間を彼岸会として、日本の風土の仏教として溶け込み信仰するようになりました。

ラビンドランRI会長の信仰する「ヒンドゥー教」は、紀元前5世紀頃に、政治的な変化や仏教の隆盛がありバラモン教に変貌を迫られ、その結果、バラモン教は民間の宗教を受け入れ、同じくしてヒンドゥー教へと変化しました。そしてヒンドゥー教は、紀元前5~4世紀頃に顕在化し始め、紀元4~5世紀に当時優勢であった仏教を凌ぐようになり、その後、インドの民俗宗教として民衆に信仰されるようになり、神々への信仰と同時に輪廻や解脱という独特な概念を有し、四住期に代表される生活様式、身分、職業までも含んだ、カースト制等を特徴とする宗教に発展してきました。

ヒンドゥー教の三大神とされる「ブラフマー神」は、宇宙創造の神、「ヴィシュヌ神」は、宇宙維持の神、自愛の神と称され、「シヴァ神」は、宇宙の寿命が尽きた時に世界を司る神として信仰されています。現在ではブラフマー神を信仰する人は減り、ヴィシュヌ神、シヴァ神が二大神として並び称され、信仰されています。

ヒンドゥー教は多神教で、地域や所属する集団によって多様な信仰形態をとり、ヒンドゥー教としての範囲は非常に曖昧で、インド憲法では、ヒンドゥー教から分派したと考えられるシーク教、ジャイナ教、仏教を信仰する人も広義のヒンドゥー教として扱われています。

また、ヒンドゥー教では、仏教の開祖釈迦牟尼はヴィシュヌ神の9番目の化身とされています。ヒンドゥー教の神や祭祀は、形を変えながら日本の仏教にも多大な影響を与えてきました。七福神の大黒天・毘沙門天・弁財天はヒンドゥー教の神の化身です。福祿寿・寿老人は中国道教の神、布袋様は中国の禅僧、恵比寿様だけがイザナミ・イザナギの間に生れた子供を祀ったもので、福の神、五穀豊穰をもたらす唯一、日本由来の神であります。

出 報 告	ゲスト 0名	ビジター 0名	会員 24名
	欠席 9(免除者 3名)		出席率 71.43%
	前回の修正出席率 87.50		前々回の修正出席率 91.67%

事前メイクアップ 1名

幹事報告

ガバナーより

1. 10月のロータリーレート 1ドル120円
米山記念奨学会より

1. 10月米山月間資料のご案内

10月の米山月間に限らず、お使いいただける資料となりますので常時ご活用下さい。

連絡事項

1. 10月25日(日)は地区大会です。
2. 10月の例会は、2日の理事会・通常例会、9日の社会奉仕活動(山もみじの除草刈り)、16日の通常例会、23日は規定により休会、30日の通常例会です。尚、10月は、第2回目の会費の集金月となりますので、皆様のご協力をお願い致します。

スマイルBOX

無し



卓話

望月 博文

「立川談志」

落語家の名跡。五代目を名乗った(正確には7代目と言われる)落語立川流家元、立川談志(本名:松岡克由 まつおかかつよし)は1936年1月2日、東京生まれ、16才で高校を中退して五代目柳家小さんに入門、63年に真打ちに昇進して五代目立川談志を襲名。

日本テレビ系の「笑点」企画、立案し、66年番組開始から初代司会者を務めて人気者となる。同年代の先代三遊亭円楽や古今亭志ん朝、先代春風亭柳朝とともに「寄席四天王」と呼ばれた。また、独自の社会批判や奔放な毒舌でもファンを増やした。

71年には、参議院議員選挙全国区に無所属で出馬し最下位で当選、1期6年間務めた。

この間、自民党に入党し、沖縄開発庁政務次官に就任したが、二日酔いで記者会見に出席したことがもとで、わずか1か月で次官を辞任した。

83年、真打ち昇進制度を巡る対立により、師匠小さんが会長を務める落語協会を脱会、落語立川流を創始し家元となった。以降、常設の寄席に出演できなくなったものの、ホールでの落語会を続け、志の輔、談春、志らくらなどの人気落語家を育てた。芝浜、文七元結など古典落語の名手だった。理論家でもあり、筆書に現代落語論などがある。

97年に食動がんが見つかり、2008年に声門がんの手術、2009年には糖尿病治療と体力低下のため休養するなど、闘病を続けていた。晩年は喉頭がんを患ったが、プライドが許さないとして声帯の摘出手術はせず、落語への意欲を見せた。

その後、がん進行で呼吸困難症状となり、2011年3月下旬に気管切開手術を受け、声を失った。同月6日、一門会で披露した蜘蛛駕籠(くもかご)が最後の高座となった。

同10月下旬に容態が急変し、以後3週間、意識がもどらないまま、11月21日、75歳で死去した。

戒名は本人が以前から決めていた「立川雲黒齋家元勝手居士(たてかわうんこくさいいえもとかつてこじ)」。